

令和元年6月26日現在

機関番号：32611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02692

研究課題名(和文) L2リーディングにおけるモチベーションと読解力を高める教材・指導法の研究

研究課題名(英文) Fostering motivation for learning and reading English through authentic materials and communicative teaching

研究代表者

林 千代 (Hayashi, Chiyo)

国立音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号：30365522

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は日本人大学生を対象とし、どのような「教材」および「指導法」が「英語および英語リーディング」に対するモチベーションを高める効果があるかについて、実証研究を行うことである。研究の理論的背景としては自己決定理論に依拠し、「自律性、関係性、有能性」を高めるべく、オーセンティックな教材とコミュニカティブ・ランゲージ・ティーチングを取り入れた「コンテンツベース」の授業を行った。その結果、内発的モチベーションが有意に向上し、無動機が下降したことが明らかになった。また、自律性を高めるために、授業内に「チョイス」を取り入れて、その効果も検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、大学における英語の授業において、モチベーションを高める効果のある教材と指導法を明らかにした点である。学生にとって「興味を持てる・役に立つ・理解可能な教材」を用い、コンテンツベースのコミュニカティブな授業を行うことで、学生の英語に対する関心や興味が高まることが明らかになった。また、教育研究・実践の場で広く参照されている自己決定理論が、日本人大学生の英語に対するモチベーションを解明するためにも有効であることが示された。さらに、自律性を高めるための有効なアプローチとして、授業内で学生にチョイス、「自ら選ぶ機会」を与えることが効果的であることも明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the current study is to examine what kind of materials and teaching approaches are effective for fostering motivation for learning and reading English. The theoretical background of the study is self-determination theory. The participants of the study were Japanese college students. In order to enhance EFL students' autonomy, relatedness, and competence, classes were taught using the content-based approach with authentic materials from the Internet. Furthermore, in order to enhance autonomy, activities where students were given "choice" were practiced. The results of the study indicated that these practices were effective for fostering intrinsic motivation for learning and reading English and that it is important to provide materials that are interesting and comprehensible for students.

研究分野：英語教育

キーワード：EFL learners motivation autonomy authentic materials content-based

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、米国におけるリーディング(L1)に対するモチベーション研究(Guthrie & Alao, 1997)を基盤とし、日本人大学生の第二言語(英語)におけるリーディングに対するモチベーション(L2 reading motivation, L2RM)の構成要因を量的に解明することからスタートした。L2RMを調査するために、質問紙を作成、1,030名の日本人大学生を対象にアンケート調査を行った。このアンケートを分析した結果、L2RMは9つのタイプの要因(内発的、統合的、道具的、外的、無動機など)から成り立つことが明らかになった。また、L2リーディングの熟達度(proficiency)は、内発的動機(intrinsic motivation)と有意な相関関係があることが明らかになり、内発的動機を高めることで、英語を読む力も高まる可能性が示唆された。

(2) 上記の結果を基に、内発的動機を高めるべく、英語の「教材」および「指導法」を研究する。本研究が理論的基盤としているのは、アメリカの心理学者である Edward L. Deci と Richard M. Ryan が提唱している自己決定理論(Self-determination theory、以後SDT)である。SDTとは、さまざまな領域において、動機づけを解明するために参照されている包括的な理論的枠組みであり、外国語教授法研究においても、多くの研究者がこの理論を研究の拠り所としている(Deci & Ryan, 2000)。SDTの根本にあるのは、自己決定の重要性、つまり、学習者自らが決めるという「自己決定」の度合いが大きければ大きいほど、動機づけも大きくなるという理論である。SDTの特徴の一つは、外発的動機づけを自己決定の度合いにより、いくつかに細分化し、内発的動機づけにつながる連続体としてとらえていることである。SDTは内発的動機づけ(intrinsic motivation)が高まる前提条件として、3つの心理的欲求が満たされることを想定している。「自律性(autonomy)の欲求」は、自分の行動を自分がコントロールしているという実感であり、「有能性(Competence)の欲求」は行動をやり遂げる自信や自己の能力を示したいという欲求、「関係性(relatedness)の欲求」は周囲の人々や社会と密接なつながりを持ち、他者と友好的な関係性を築きたいという欲求である。SDTによると、これらの3つの欲求が満たされた結果、学習者は内発的に動機づけられ、学習にも自律的に取り組むようになるとしている。

本研究が「外国語教授法」の理論的枠組みとして参照したのは、「内容重視教育法」(content-based instruction、以後CBI)である。CBIは、近年CLIL(content and language integrated instruction)と同様に注目を浴びている言語教育のアプローチである。CBIには大きく2つの目標があり、「外国語の習得」とその外国語を使って教える「教科内容の習得」を目指す。例えば、「英語で行う歴史の授業」や「音楽を英語で教える授業」が挙げられる。

上記のモチベーション理論と外国語教授法に基づいて、学習者のモチベーションを高めるために、2種類の統合的な授業をデザインし、その効果をそれぞれ実証的に検証した。自己決定理論に基づいて、「自律性(autonomy)の欲求」、「有能性(Competence)の欲求」、「関係性(relatedness)の欲求」を満たす指導法・アクティビティを取り入れ、内容重視教育法の枠組みに沿って、オーセンティックな教材(コンテンツ)を取り入れた授業実践を行った。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は日本人大学生を対象に、どのような「教材」および「指導法」が「英語および英語でのリーディング」に対するモチベーションを高める効果があるかについて、実証研究を行うことである。研究の理論的背景としては、自己決定理論に依拠し、「自律性」、「関係性」、「有能性」を高めるべく、「オーセンティックな教材」(authentic materials)と「コミュニケーション・ランゲージ・ティーチング」(communicative language teaching)を取り入れたコンテンツベース(内容重視教育法)の授業を行い、学生のモチベーションの変化を調査する。

(2) 自律性を高めるために、授業に「チョイス」、つまり「学生が自ら選ぶ活動」を取り入れ、その効果を検証する。

3. 研究の方法

(1)【モチベーション・アンケート調査】

参加者のモチベーションの変化を調べるために、質問紙(Hiromori, 2006を参照)を作成し、参加者のモチベーションの変化を縦断的に調査した。参加者は、研究者が教える音楽専攻の大学生(一般教養としての必修英語履修者)である。英語力が中級および初級レベルの学生を対象とし、英語力別に異なる教材(Web上のオーセンティックなマテリアル)を用いて授業を行い、その効果を検証した。英語力が低い学生には、教材として比較的わかりやすい英語の歌の歌詞を取り扱った。英語力が中級程度の学生には、インターネット上のTED Talksから比較的平易なプレゼンテーションを取り上げた。いずれの場合も、「英語を聴きながら読む教材」として使用した。アンケート調査を2回(4月と7月)に行い、学生のモチベーションの変化を統計的に分析した。

(2)【チョイスを取り入れた実践の効果】

Deci & Ryan (2000)によると、学習者に自ら選ぶ機会を与えることで、「自律性」が高まるとされている。そこで、英語の授業に「チョイス」、つまり、学生が自分で選ぶ機会を取り込んだ授業活動を行った。具体的には、プレゼンテーションのトピックを自ら選ぶチョイスを取り入

れた。その活動の前後に、アンケート調査を行い、このチョイスがどのように学習者のモチベーションに関わっているかを量的・質的に調査した。

4. 研究成果

(1)【英語でのリーディングに対するモチベーション(RM)調査】

日本人大学生($N = 1,030$)を対象としたアンケートを分析の結果、以下の3点が明らかになった。RMは内発的動機と外発的動機を含む9つの要因から成り立つ。RMと英語読解力には有意な関係があり、内発的動機が外発的動機よりも、より大きな影響力を持つ。また、外発的動機の中では、道具的動機がもっとも高い影響力を持つ。第一言語と第二言語(L2)におけるRMを比べると、いくつかの要因は共通である一方、L2言語特有な要因(道具的動機、L2リーディングに対する自信)があることが明らかになった。

(2)【英語学習者のモチベーションを高める教材・指導法の実践・研究】

理論的枠組みとしては、自己決定理論(Deci & Ryan, 1985)を用い、4つの研究を行った。

研究1：英語学習に対するモチベーションを調査するために、質問紙を用いて、日本人大学生($N = 1,066$)の英語学習に対するモチベーションを量的に検証した。結果として、内発的動機(intrinsic motivation)、同一的動機(identified motivation)、取り入れの動機(introjected motivation)、外的動機(external motivation)、無動機(amotivation)が抽出され、自己決定理論がモチベーションの理論的枠組みとしてふさわしいことが明らかになった。

研究2：音楽専攻の学生($N = 90$)を対象に、学習者のモチベーションを高める言語教授法として有効である「コンテンツベースの授業」(content-based instruction)を実践した。教材としては、インターネット上に公開されているTED Talksから、音楽に関するプレゼンテーションを選んだ。TED Talksは映像を見ながら、「英語を聞く・字幕を読む」教材として使用した。一年間にわたって学生のモチベーションの変化を調査した結果、内発的モチベーションが優位に上昇し、無動機が下降したことが明らかになった。学生の自由記述を分析した結果、多くの学生は、「TED Talksの内容が興味深かった」、「楽しく、自然に英語が学べた」と記述していた。少数であるが、教室外でも自分でTED Talksを聞き、英語を学ぶ自律した学習者になった学生もいた。しかし、同時に、「英語が早すぎてわかりにくい」などの記述も見られ、学生の理解度を高めるためには、さらなる「足場架け」も必要であることが明らかになった。また、内容としては、音楽専攻学生を対象に行った授業であったので、音楽に関するTED Talksを選んだが、音楽以外の内容を学びたいと述べた学生もいたため、学生の多様な興味と関心に応えることも必要であることがわかった。

研究3：英語の歌の歌詞を「英語を聞きながら、歌詞を読む」教材として使用し、コンテンツベースの授業を一学期間(4月~7月)行い、学生のモチベーションの変化を調査した。対象は、英語を苦手とする音楽大学の学生であった。アンケートを量的に分析した結果、英語の歌を使った実践が、内発的モチベーションを優位に高め、無動機が下降したことが明らかになった。学生が学期末に記入した振り返りによると、本実践は多くの学生のモチベーションを高め、英語を学ぶことへの意欲を高めたことが明らかになった。しかし、同時に、「英語の歌詞の中にはわかりにくい文章や口語的な表現がある」との指摘もあり、英語の歌を教材として使用する際には、歌詞を注意深く吟味して選ぶ必要があることも明らかになった。

研究4：英語の授業に「チョイス」を取り入れ、その効果を検証する研究を実施した。自己決定理論(Deci & Ryan, 2000)によると、学習者にチョイス(自分で選ぶ機会)を与えることにより、学習者の自律性が高まり、その結果、内発的なモチベーションが高まるとされている。本研究は、学習者にプレゼンテーションのトピックを自分で選ぶ機会を与え、その効果を検証するために、アンケート調査を行った。具体的には、必修英語授業において、70名の音楽専攻の学生を対象に、「Talk like a TED speaker」(「TEDスピーカーのように話してみよう」というプレゼンテーション・プロジェクトを行った。このプロジェクトは、2つの局面から成り立っており、まず、学生はいくつかのTED Talksの学習を通して、英語とプレゼンテーション・スキルを学んだ。次に自分の選んだトピックについてプレゼンテーションを行った。その後、学生が自らトピックを選んだことをどのように感じたかについて、アンケート調査を行った。その結果、41名(59%)の学生はトピックを自分で選んだことで、モチベーションが高まったと答えた。一方、自分で選ぶよりも、教員からトピックを与えられるほうが良いと答えた学生は19名(24%)であった。興味深いことに、プレゼンテーション終了後に、「トピックを教師から与えられるよりも自ら選んだほうが良い」と考えを変えた学生も9名(13%)いた。その理由としては、「プレゼンテーションから多くを学んだことから、自分で選んだほうが良いと思った」と記述していた。これらの結果から、多くの学生は自分で選ぶことを好む傾向にあるが、そうではない学生も少なからずいること、また自分でトピックを選び、やりがいのある経験をすることで考えを変え、「自ら選ぶこと」を肯定的に思い始める学生もいることが明らかになった。

(3)【研究の総まとめ】

SDT の枠組みに基づいて、3つの心理的なニーズを満たす教育介入を行った結果、以下の示唆が得られた。学生の興味・英語力にふさわしい教材を授業に導入することにより、内発的モチベーションが高まる。コンテンツベースの授業を行いながら、学生に英語で自己表現をする場を提供することにより、関係性が高まる。英語力が低い学生については、有能性を高める「理解可能な教材」を使用することにより、英語に対する苦手が弱まり、モチベーションの向上・やる気につながる。指導法としては、学生にチョイス、つまり自己決定する機会を与えることが「自律性」の向上につながり、「達成感」や「やりがい」につながる。

<引用文献>

- Hinomori, T. (2006). The effects of educational intervention on L2 learners' motivational development. *JACET Bulletin*, 43, 1-14.
- Ryan, M.R. & Deci, E. L. (2000). Intrinsic and extrinsic motivations: Classic definitions and new directions. *Contemporary Educational Psychology* 25, 54-67.
- Guthrie, J.T., & Alao, S. (1997). Designing contexts to increase motivations for reading. *Educational Psychologist*, 32, 95-105

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 12 件)

- Hayashi, C. (2015) Japanese learners' motivation for reading English. *ProQuest Dissertation and Theses*.
<https://www.worldcat.org/title/japanese-learners-motivation-for-reading-english/oclc/958157418>
- 林 千代、音楽専攻大学生の英語学習に対するモチベーション、国立音楽大学研究紀要、Vol.51、2016、123-134
- 林 千代他、Let's sing American songs、国立音楽大学音楽研究所年報、Vol.27、2016、1-22
- 林 千代、音楽専攻大学生の英語学習に対するピリーフ(予備研究、国立音楽大学研究紀要、Vol.52、2017、153-162
- 林 千代、動機づけを高める統合的な英語授業、英語教育 Vol.66、No.11、2017、68-69
- Hayashi, C. (2018). Choice in EFL classrooms. *Journal of Language Learner Development* 1 (査読あり), 4-14.
- Hayashi, C., & Miyajima, M. (2018). Content-based instruction with songs. *Journal of Kunitachi College of Music*, 53, 397-398.

[学会発表](計 24 件)

- Hayashi, C. (2015). Impact of different types of content on foreign language learning Motivation. Psychology of Language Learning 2. University of Jyväskylä, Finland.
- Hayashi, C. (2015). L2 learners' motivation for L2 reading. EURO SLA. University of Jyväskylä, Finland.
- Hayashi, C. (2015). Effects of content-based instruction on L2 learners' motivation. 大学英語教育学会(鹿児島大学)
- Hayashi, C. (2016). Japanese college students' motivation for reading English. TESOL. Seattle, USA.
- 林 千代(2016)モチベーションを高める実践的な英語指導(1、大学英語教育学会教育セミナー(関西外国語大学))
- 林 千代(2017)モチベーションを高める実践的な英語指導(2、大学英語教育学会教育セミナー(龍谷大学))
- Hayashi, C. (2017). Motivating less proficient learners of English through songs. 大学英語教育学会(東北学院大学)
- Hayashi, C. (2017). Choice in EFL classrooms. 関東甲信越英語教育学会(新潟大学)
- Hayashi, C. (2018). Motivating EFL Learners: using TED Talks in English classrooms CLIL学会(恵泉女子大学)
- 林 千代(2018)Web教材を活用した「ブレンド型学習」とその効果、大学英語教育学会教育セミナー(京都府立大学)
- Hayashi, C. et al. (2018). EFL learners' beliefs and motivation, Psychology of language learning 3 (Waseda University)

〔図書〕(計2件)

Hayashi, C. (2018). *Japanese college students' motivation for reading English*. Hiroshima: Keisuisha.

林 千代, 溪水社、英語学習者のモチベーションを高めるための授業実践とその効果--オーセンティックな教材を用いて (Motivating EFL Learners with Authentic Materials, 2019, 96)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1 研究分担者)

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2 研究協力者)

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。